保育実習の効果に関する心理学的研究

——実習経験が保育者観と自己評価に与える効果——

須　見　喜　六

1. 研究の目的

保育実習（ここでは幼稚園教育実習も含ませる）が，学生に保育者観を確立させ，自己理解を深めさせる上に，どのような効果を与えているであろうか。

小学校教諭と中学校教諭を志望する教員養成学部学生の教育実習の効果に関する教育心理学的研究については，既に岩井勇次[4]と井上健治[2)3)]の研究があるが，保育者養成課程の学生の保育実習の効果に関する心理学的研究は見当らない。

本研究は，短期大学保育科の学生について，保育実習が保育者観と自己評価の変容にどのような効果を与えるかを心理学的立場から研究し，もって保育者養成のあり方の反省に資しようとする。

2. 研究の方法

質問紙法による。保育者観については，表の1の様式により，自己評価については表の2の様式による。

保育者観については1971年12月4日調査。

自己評価については1970年5月15日，同7月17日，同10月2日，1971年1月22日，同11月27日の5回調査。

対象は岡山県立短期大学保育科昭和45年度入学者50名。

保育者観については実習前（入学直後）と実習後（卒業直前）を比較してその変容について内省報告させ，自己評価については5回調査の時点の得点の変化を比較すると共に，第1回と第5回を比較してその変化の原因を実習後内省報告させる方法をとった。

表 1　　保育者観の変容に関する調査票

実習を経験していなかった時点（入学直後）と，すべての実習が終った時点（現在）とを比較して，あなたの保育者観にどのような変容がありましたか。下のあてはまるところに答を書いて下さい。

1. 変容の程度（あてはまるところに○をつけて下さい。）　ちっとも変らない　少し変った　かなり変った　とても変った
2. 保育者観がどのように変容したか具体的に書いて下さい。
3. いつの実習がもっとも大きな変容を与えましたか。あてはまるところに○をつけて下さい。

施設見学（1970 6.3）	施設参加実習（1970.7.2～1970.7.11）
保育所見学（1970.9.30）	保育所参加実習（1970.12.9～1970.12.19）
幼稚園見学参加実習（1971.6.1～1971.6.13）	施設総合実習（1971.8.28～1971.9.3）
幼稚園総合実習（1971.10.30～1971.11.13）	

4. 変容させる直接の原因となった経験について具体的に書いて下さい。

表 2　　自　己　分　析　票

あてはまるところに○をかき入れなさい。

	ちっとも	少しは	ふつう	かなり	とても
1. 子どもが好きか。					
2. 子どもから好かれるか。					
3. 子どもへの思いやりがあるか。					
4. 保育者として使命感をしっかりもっているか。					
5. 使命感に向って努力しているか。					
6. 保育活動に対して積極的か。					
7. 明朗か。					
8. 協調的か。					
9. 健康や体力に自信があるか。					
10. 研究心は旺盛か。					
11. 保育実技に秀でているか。					
12. 好ましい集団づくりができるか。					
13. 保育以外の一般教養が身についているか。					

3. 結果と考察

(1) 保育者観の変容

実習経験による保育者観の変容の程度については表の3に示す。

変容しなかったと答えたもの2%。「かなり」と「とても」を合わせると74%の高い率である。次に変容の具体的内容を表の4に示す。

表3　実習による保育者観変容の程度

変容の程度	実数	%
少しも変化なし	1	2.0
少し変化した	12	24.0
かなり変化した	32	64.0
非常に変化した	5	10.0
計	50	100.0

$x^2=45,520$　df=3　$P<0.01$

表 4　　実習による保育者観変容の内容

回答のカテゴリー	頻数	%
子どもへの接触の仕方の大切さを知った	10	11.9
保育者自身の人格が大切であることを知った	10	11.9
保育者の責任の重大さを知った	9	10.7
保育者の職務内容がわかった	7	8.3
やり甲斐のある仕事であると思った	6	7.1
子どもの可能性を伸ばすことの大切さを知った	6	7.1
専門的知識技術の大切さを知った	5	6.0
仕事のきびしさを知った	4	4.8
社会的観点から見るべきと思った	2	2.4
保育者観が明確化した	2	2.4
その他の答	23	27.4
回答頻数合計	84	100.0

注　1人が2つの回答をしたものもある。

最も多いのは，保育者自身の人格がそのまま幼児の上に反映している事実を直接観察することによって，保育者の責任の重さを痛感したというものである。

保育者の職務内容を知ったというものがあるが，中にはその労働条件の酷しさを知ることによって，最初の甘かった保育者観を修正したというものも少数ある。

保育者観に最も大きな変容を与えた実習はどの種類の実習であったかについては表の5に示す。

表5　保育者観に最も大きな変容を与えた実習の種類

種　　類	時　　期	実　数	%
児童収容施設見学	1970. 6. 3	0	0
児童収容施設参加実習	1970. 7. 2 ｜ 7.11	0	0
保育所見学	1970. 9.30	0	0
保育所参加実習	1970. 12. 9 ｜ 12.19	4	8.0
幼稚園見学参加実習	1971. 6. 1 ｜ 6.13	8	16.0
児童収容施設総合実習	1971. 8.28 ｜ 9. 3	6	12.0
幼稚園総合実習	1971. 10.30 ｜ 11.13	32	64.0
計		50	100.0

$x^2=40,960$　df＝6　P＜0.01

幼稚園の総合実習が最も大きい影響を与えているものが多い。その原因を個々の学生から質問紙により調査してみたところ，次のようなことがわかった。幼稚園の総合実習が全責任を任せられてクラスの子どもを担当したこと，時期が最も就職の時点に近づいて，真剣味を持ったこと，そして学生は幼稚園教諭への就職志望が最も多いことなどによるものである。

保育者観変容の原因となった経験内容については表の6に示す。

表　6　　保育者観変容の原因となった経験内容

回答のカテゴリー	頻　数	%
保母（教諭）を観察して	16	28.1
自分に任せられてやってみて	7	12.3
細かい配慮の行届いたカリキュラムの立案から	7	12.3
子どもがなついてくれて	5	8.8
子どもと遊んでみて	4	7.0
保母（教諭）と対話してみて	4	7.0
その他の答	14	24.5
回答頻数合計	57	100.0

注　1人が2つの回答をしたものもある。

職場で働いている保育者の活動を直接観察したことが第1位になっている。次には自分に任せられてみて，カリキュラムの立案まで自分でしてみてなどである。その次には直接子どもと

接してなついてくれたかどうかということが変容の原因となっている。先輩保育者と直接対話することも7％を占めている。

（2） 自己評価の変容

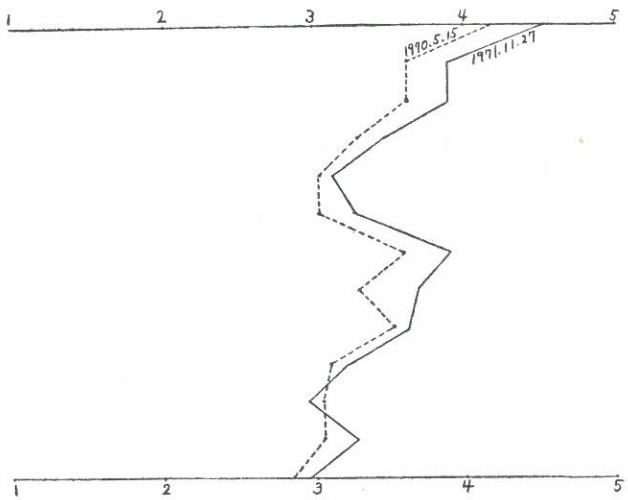
自己評価の得点の分布は表の7に示す。

表 7　　適性別自己評価得点分布の比較　1970.5.15（1971.11.27）

段階＼点適性	1	2	3	4	5
1. 子ども好き			8(1)	28(22)	14(27)
2. 子どもから好かれる		0(1)	25(7)	18(36)	7(6)
3. 子どもへの思いやり		3(0)	17(9)	25(35)	5(6)
4. 使命感		7(6)	23(16)	19(26)	1(2)
5. 努力		11(11)	28(24)	10(13)	1(2)
6. 積極的		8(4)	34(30)	7(14)	1(2)
7. 明朗		1(1)	23(11)	22(28)	4(0)
8. 協調		4(1)	24(14)	20(33)	2(2)
9. 健康体力		8(3)	16(19)	18(23)	8(5)
10. 研究心		14(6)	18(28)	15(14)	3(2)
11. 保育実技	1(1)	7(9)	31(35)	11(4)	0(1)
12. 集団づくり		10(1)	29(31)	10(18)	1(0)
13. 一般教養		11(6)	35(40)	4(4)	
計	1(1)	84(49)	311(265)	207(270)	47(65)

未だ実習を経験していなかった時点（1970.5.1 5）とすべての実習を終了した時点（1971.11.27）との平均得点の差を比較して，プロフィールで示すと図の1のとおりである。

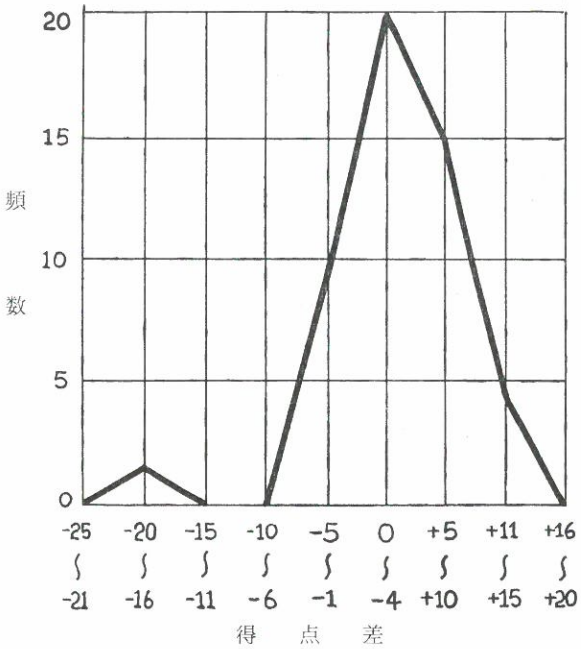
図 1　　自己評価平均点プロフィールの比較



総得点の平均は実習前3.33，実習終了後3.53であって有意の差ではないが，プロフィールに示すとおり，実技の項目を除いてはすべての項目において上向きの変化の傾向が見られ，人数において平均得点上昇35名，不変4名，下降11名であって1％の有意水準において上昇者が下降者よりも多い。

上昇，下降の巾を図の2に示す。

図　2　　個人別総得点の平均の差の分布
(1970.5.15と1971.11.27の差)



事例的に検討してみると，最も上昇した事例は＋14に及び，これは実習経験により自信を深めたことが主な原因となっている。最も下降した事例は－17に及び，これは保育実技，とりわけ音楽リズムへの不得意が他の項目の評価にも般化したと見られる事例である。

評価の項目を通覧して気がつくことは，ある学生はすべての項目について過大評価の傾向があり，また他の学生はすべての項目において過小評価の傾向が伺われる。

5回行なった評価の総得点の平均を比較すると，＋4,20　＋4,86　＋3,98　＋3,47　＋7,22と変化しており，最終回が最も大きな変化を示して，保育者観の場合と一致する。

自己評価と実習成績の評価との関係を表の8に示す。

統計的に有意の差は見られない。自己評価が下位群であって，実習成績の評価では上位群に属するものが1例あり，逆に自己評価が上位群であって，実習成績の評価が下位群に属するものが1例ある。なお実習成績の評価は上位群と下位群に点数の大きな開きがなかったことも考慮しなければならない。

表8　　自己評価と実習成績との関係

実習成績評価＼自己評価	上	中	下	計
上	3	5	1	9
中	6	22	4	32
下	1	6	2	9
計	10	33	7	50

$x_2=1,905$　df＝4　P＜0.80

次に保育適性別に実習前（1970.5.15）と実習後（1971.11.13）の2つの時点を比較して，自己評価が上昇したか下降したかを段階点で示すと表の9のとおりである。

表 9　　特性別自己評価の変容度

特性＼変容度	＋3	＋2	＋1	0	－1	－2	－3	計
1. 子どもが好き		3	18	27	2			50
2. 子どもから好れる		1	24	20	4	1		50
3. 子どもへの思いやり	1	1	19	25	4			50
4. 使命感		1	12	27	7	3		50
5. 努力	1	2	11	23	12		1	50
6. 積極的		2	16	27	4	1		50
7. 明朗		1	19	25	5			50
8. 協調		3	19	20	8			50
9. 健康体力		4	9	26	10	1		50
10. 研究心		2	15	20	12	1		50
11. 保育実技			9	28	11	2		50
12. 集団づくり		1	16	30	2	1		50
13. 一般教養			12	33	5			50
計	2	21	199	331	86	10	1	650

上昇しまたは下降した原因を反省して記入させた結果を検討してみると次の如くである。

① 子どもが好きか。

2段階上昇例が3名あり，その原因は，「実習のとき子どもとじかに接触して可愛いと思うようになった。」「子どもに接触する機会がふえたので愛情が深まった。」「子どもがなついてくれたので一そう好きになった。。」である。1段階上昇例は18名あり，その原因としてあげていることは，やはり前述の如く「子どもとじかに接触することによって子どもの可愛さ，純粋さ，すなおさがよくわかり愛着が増した。」というものが最も多い。2段階下降した例はない。1段階下降例は2名あり，その原因は「実習前は自分に対して甘い評価をしていたが，実習を経験してみて，自分が保育者に適しているかどうか反省させられた。」ものである。

② 子どもから好かれるか。

2段階上昇例1名，1段階上昇例24名。何れも実習のときに子どもと接触してみて子どもがなついてくれたことから自信を高めたものである。

2段階下降例1名は，実習前は自分を知らなかったため評価が甘すぎたもの。1段階下降例4名は実習のときに子どもたちが自分よりも他の実習生になつくのを見て自信を失ったものである。

③ 子どもへの思いやりがあるか。

3段階上昇例1名は，子どもがなついてくれたので意欲が湧いたもの。2段階上昇例1名は，子どもと楽しく遊んで，子どもがしたってきたので，というもの。1段階上昇例19名では，実習経験により自分が思いやりのあることに自信を得たものが最も多く（7名）その他は実習により子どもへの理解と愛情が深まった，子どもに対する気持がはっきりしてきた，扱い方に慣れた，常に努力したので向上したなどである。

1段階下降例4名は，実習前より客観的に自己を見ることができるようになり，甘かった評

価を修正したものである。2段階以上の下降例はない。

④　使命感をしっかり持っているか。

2段階上昇例1名は，子どもと一しょに遊んでみてよく指導が出来たと感じたので。1段階上昇例12名は，実習に出てから子どもへの気持がはっきりして来たものと保育への関心が深まったものが最も多い。(10名) 2段階下降例3名は，職場の労働条件が酷しくて職場が理想的でなかったもの（2名）と郷里に就職口がなくて会社就職に内定したもの（1名）である。1段階下降例7名は，実習前は自己評価が甘すぎた，実習により現実の酷しさを知った，子どもが自分よりは友人の方へよくなついたのでなどである。

⑤　使命感に向って努力しているか。

3段階上昇例1名は，保母への志望がかたまったので。2段階上昇例2名は，志望が固まったものと実習により努力が身についてきたもの。1段階上昇例11名は，就職問題が具体化してきたためのもの，実習に出て心構が身についたもの，先生からはげまされてなどである。3段階下降例1名は，実習前に現実を知らないで過大評価していたのを修正したもの。2段階下降例はない。1段階下降例12名は，郷里に就職口がなくて会社就職に内定のため，実習において友人と比較して自らの足りないことをさとったもの，わかっているが出来ないもの，職場の条件が理想的でないので意欲が湧いて来ないものなどである。

⑥　保育活動に対して積極的か。

2段階上昇例2名は，実習に出て積極的にしなければならないと感じたものと実習に出てやってみようという意欲が湧いたもの。1段階上昇例2名は，実習に出て心構が身についたものや，就職問題がもち上って，将来のことを真剣に考えるようになったもの，実習により保育への興味が増してきたもの，実習により子どもへの理解と愛が深まったものなどである。2段階下降例1名は，音楽リズムの不得手が波及したもの。1段階下降例4名は，会社就職内定のもの，実習前の評価が甘すぎたものなどである。

⑦　明朗か。

2段階上昇例1名は，現在人生が充実しているからというもの。1段階上昇例19名は，実習により明朗さが身についたもの，就職期が迫ってきて熱意が湧いたもの，保育科へきてよかったとだんだん思うようになったもの，性格が変った（たとえば自分をあらわしやすくなった）などである。2段階下降例はない。1段階下降例5名は，実習前評価の甘すぎたもの，保育場面になると引込思案になるもの，その他は単に実習経験で何となく下降したというものである。

⑧　協調的か。

2段階上昇例3名は，横のつながりが大切なので努力しているものと，はじめは保育科へ入学して悩んでいたが，今では入学してよかったと感謝するようになったので協調的になったというものなどである。1段階上昇例19名は，実習の過程において協調性の必要を感じて身についたというものが多い。

2段階下降例はない。1段階下降例8名は，積極的になったために自己主張が強くなったもの，実習中に頑固で沈みこんでいる自分に気がついたものなどである。

⑨　健康や体力に自信があるか。

2段階上昇例4名は，何れも実習経験をしてみて自分の健康や体力に自信が持てるようになったもの。1段階上昇例9名も同様である。2段階下降例1名は，自分の健康や体力の保持に努力が足りなかったことを反省しているもの。1段階下降例10名は，実習により多忙な職務であることがわかり，耐えられるかどうか不安になったものである。

⑩　研究心は旺盛か。

2段階上昇例2名は，自分はいろいろと考えてみる方だからというものと，実習により自信を得たというもの。1段階上昇例15名は，実習により心構えが出来たものと，2年間の授業により自覚が出来たものである。

2段階下降例1名は，現役の職員と比較してみて，自分は足りないと感じたもの。1段階下降例12名は実習中に友人と比べてみて自分が足りないことがわかったものである。

⑪　保育の実技に秀でているか。

2段階上昇例はない。1段階上昇例9名は，努力によって向上したもの，保育者としての自覚が出来たので向上したもの，実習に出て向上したことを知ったものなどである。

2段階下降例2名は，職場の労働条件が理想的でないために実技へも意欲が湧かないというものと特に音楽リズムが苦手と思っているものである。1段階下降例11名は，教員の採用試験の際にマット運動が出来なくてショックを受けてからというものと，実習の場で自信を失ったというものと，特に音楽リズムが苦手であるから自信を失ったというものなどである。

⑫　好ましい集団づくりが出来るか。

2段階上昇例1名は実習のとき子どもがついてきてくれたからというもの。1段階上昇例16名は，授業を受けて自覚が高まったというものが最も多い。2段階下降例1名は，音楽リズムが苦手であることが外のことにまで影響して嫌になったものである。1段階下降例2名は，友人関係がうまくいっていないので評価が下ったものと，実習を重ねてだんだんわかってきたものとである。

⑬　保育以外（一般教養）が身についているか。

2段階の上昇下降例共にない。1段階上昇例12名は，わりあいに身についているつもりというもの。1段階下降例5名は，政治などへの関心がないためというものと，実習に出て保育の専門教科だけでは駄目であると感じたからというものなどである。

4. 要　　約

本研究は，保育者養成課程の学生の保育実習が保育者観の確立と自己理解の徹底の上にどのような効果を与えるかを検討するために行なわれた。短大保育科の学生50名に対して質問紙法による調査を行ない，実習前と実習後を比較しつつ，実習による保育者観と自己評価の変容について検討したところ，次のような結果が得られた。

保育者観については，実習による変容の程度は，「かなり」以上のものが74％であり，変容しないと答えたものは2％に過ぎない。最も大きな変容を与えた実習は，方法別に見れば総合実習が76％を占めて最も多く，実習先別に見れば幼稚園実習が80％を占めて最も多い。変容の内容については，保育者の個性がそのまま幼児に反映する事実を目の当りに見て保育者の責任の重大さを自覚させられたというものが34.5％を占めて最も多い。保育者観を変容させる原因となった経験については，保育現場において保育者の活動を観察できたことと答えたものが28.1％を占めて最も多い。

自己評価については，実習前よりも実習後の方が総得点において上昇するものが70％であるが，しかし下降するものが22％ある。

5回の自己分析の結果からは，卒業時に近い最終回の実習が最も大きな変容を与えることがわかり，これは保育者観の変容の場合と一致する。

自己評価と実習成績の教師による評価との間には統計的に有意の差は見られない。

特性別に見れば，「子どもが好き」の特性の評価得点が最も高く，「実技」が最も低い。

「子どもが好き」「子どもから好かれる」「思いやり」など子どもとの関係についての特性では，子どもと実際に接触してみて子どもからなつかれたかどうかということが大きく子どもへの愛着と以後の自信の上に影響している。変容の方向は「好き」など積極的な方向へ変容するものが42%であるが，しかし子どもが自分よりは友人の方へなついたために自己評価が消極的な方向へ変容したというものが10%ある。「使命感」「努力」」「積極性」などの特性については，対象である幼児と現実に接触することによって，子どもへの気持をはっきりとさせることができ，それが使命感などの自己評価を上昇させたというものが22%ある。しかし逆に，現場の労働条件の酷しさを知ったことによって意欲を失い，「努力」などの自己評価を低下させたというものが6%ある。「明朗」「協調」「研究心」などの特性については，実習場面に直面することによって，その必要度を強く感じて努力し，自己評価を上昇させたというものが8%ある。「健康・体力」については体験によって自信を得たものの方が，多忙な職務であることを知って自信を失ったものよりやや多い。

音楽リズムなど1つの実技の不得手が，「積極性」「集団づくり」など他の特性の評価にまで般化して，自己評価を低下させている1例がある。子どもとの関係の特性および「使命感」'「積極性」,「明朗性」などの特性において，実習前は現実を知らないために過大に自己評価をしていて，実習によって自己の弱点に直面し，自己評価が低下したものがそれぞれ1例づつあり，高校における進路指導上留意しなければならない点を示唆していると考えられる。

なおこの研究は，調査対象が1つの大学のみであること，実習協力施設別の差異までは未だ検討していないことなど，今後に検討されるべき問題が残されている。

参考文献

1. 日名古太郎：現代保育研究第7巻保育実習，福村出版，東京，15～18（1967）
2. 井上健治：教育心理学年報第6集，日本教育心理学会，東京，33・34（1966）
3. 依田　新：現代青年の人格形成，金子書房，東京，295～311（1968）
4. 岩井勇次：教育心理学年報第8集，日本教育心理学会，東京，4・5（1968）
5. 厚生省児童家庭局：保母養成専門教科目教授内容ソースブック，日本児童福祉協会，東京，88～93（1965）
6. Myers,G.E.：Principles and Techniques of Vocational Guidance（日本職業指導協会訳），実業の日本社，東京，123～164（1951）
7. 日本保育学会:保育学年報1964年版，日本保育学会，東京，50・51（1964）
8. 中央幼児教育研究会：保育実習の手引，学芸図書，東京，24～29（1958）